

第3回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成28年7月21日(木)
9時55分～12時00分
旧文部省庁舎2階・文化庁特別会議室

〔出席者〕

(委員) 沖森主査, 森山副主査, 秋山, 石黒, 入部, 川瀬, 塩田, 鈴木, 関根,
納屋, 山元各委員(計11名)
(文部科学省・文化庁) 岸本国語課長, 鈴木国語調査官, 武田国語調査官,
小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第2回国語分科会国語課題小委員会・議事録(案)
- 2 石黒委員御発表資料
- 3 塩田委員御発表資料

〔参考資料〕

- 1 「国語分科会で今後取り組むべき課題について(報告)」(平成25年2月)において未検討の課題の協議で出された意見の整理(平成28年6月まで分)
- 2 国語課題小委員会における審議スケジュール(案)

〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について(報告)
- 敬語の指針

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録(案)が確認された。
- 3 石黒委員から配布資料2「石黒委員御発表資料」について説明があり, 説明に対する質疑応答が行われた。
- 4 塩田委員から配布資料3「塩田委員御発表資料」について説明があり, 説明に対する質疑応答が行われた。
- 5 石黒委員, 塩田委員の説明を踏まえ, 意見交換が行われた。
- 6 次回の国語課題小委員会について, 平成28年9月9日(金)午前10時から12時まで文化庁特別会議室で開催することが確認された。
- 7 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

事務局と相談いたしましたして, 本日発表をお願いしましたお二人の委員に, それぞれお考えを御発表していただきます。それぞれの御発表の後に質疑応答の時間を取り, 意見交換はお二人の御発表が終わってからにさせていただきます。

では, 初めに, 配布資料2に基づきまして, 石黒圭委員から, 言語研究, 特に文法研究の観点から, コミュニケーションの在り方についてのお考えを御発表いただきます。お忙しい中御準備くださり, ありがとうございます。では, よろしくお願いま

す。

○石黒委員

それでは、よろしくお願いいたします。

国立国語研究所の石黒です。25 分程度ということですので、その時間の中で、余計なおしゃべりをしないように気を付けながら御紹介していきたいと思います。

まず、今日のポイントですが、ポイントとしては二つほどあります。コミュニケーションの定義をどう考えるかということと、コミュニケーションを私の立場でどう定義した場合にどういう観点があり得るかという、その観点を紹介ということです。この二つですが、まず前提となるところをお話ししておきたいと思います。

前回のこの小委員会の中でもコミュニケーションをどう考えるべきかということがいろいろ議論されてきていると思いますし、これからまた秋に掛けて、いろいろな方から、御自身の御立場からのコミュニケーション観が御披露されると思いますが、言語学と言い切っているのかどうか疑問もあります。一応、言語を研究する者の立場からコミュニケーションの論点を整理し、今後の議論に少しでも貢献することを今回の発表の目的としております。

この小委員会、分科会の性格上、最終的にはある種の指針を示すということが想定されているのではないかとと思われるわけですが、その指針に向かっていくに当たって、コミュニケーションというものは正解がないと言いますか、人の数だけコミュニケーションのスタイルがあるとでも言いますか、いろいろな個性と多様性がぶつかり合うのがコミュニケーションだろうと思います。ですから、正解というか、こうあらねばならないというような、そういう形で議論を整理するつもりはなく、むしろいろいろなコミュニケーションのスタイルの方向を紹介していくという、こんな方法もあるよねという選択肢提示論が望ましいのではないかと個人的に考えております。先ほど正解がないと言いましたが、ある意味で正解と言うよりも最適解と申しますか、自分と相手との関係や、様々な社会的な条件とか場面とか、そういうものによって決まってくるものであって、いろいろあっていいわけです。まずある方法を選ぶと、それにはいい面と悪い面が必ず伴いますので、資料では効果と弊害と書きましたが、そういうものも併せて示していく必要があるのではないかと考えております。

それでは、まず、話の前半である「定義」についてお話しします。ただ、定義と申しましても自信は全くありません。コミュニケーションと言うと、一般的には伝え合いということになるのだらうと思います。伝え合う、人という限定を加えていますけれども、人が人に何かを伝え、何かを伝えられ、というのがコミュニケーションだろうということです。ただ、この小委員会、分科会の性格上、国語というのが付きますので、日本語による意思の疎通、特に言葉によって伝え合うわけですから、情報という面と、それに気持ち、感情というのが伴うだらうと思います。もっと分かりやすく言うならば、言葉による言葉の中身と、そして、それに伴う気持ちのやり取りであると考えることができるのではないかと思います。

一般にコミュニケーションという言葉と一緒によく出てくるのは、「円滑」だと思います。ですから、きっと、コミュニケーションという場合、社会的な通念として円滑であるということが求められているのであらうと思います。個人的には円滑でなければいけないのかというのには疑問もありますが、社会的にはそうだらうと思います。

また、コミュニケーションではバランスが重視されるという傾向があります。自分が出過ぎたり、あるいは引っ込み過ぎたりするのは余りよくありません。ある場面で人と人とが向かい合い、相手も立て、また、自分の言うべきことも言うという、そういうバランス感覚、調和というものが重視されるのではないかと考えられます。よく引用される経団連の調査がありますが、新入社員に求める能力の第1位が、2015 年度も

コミュニケーション能力でした。そう考えると、ビジネスの場面だと交渉術ということになるかもしれませんが、そういうコミュニケーションの交渉術において求められるのは、ある種の円滑さとある種のバランス感覚だと考えられます。

先ほど申しましたように、コミュニケーションと言うか、言語には、伝達するものに二つあると思います。一つは、言うまでもなく言葉の意味である情報を相手に伝えることです。ただ、ただ単に言葉は内容を伝えているだけではありません。こういった私の話し方ですごく分かりやすいと思ってくださる方もいらっしゃるでしょうし、分かりにくいなとか、受け入れ難いと思われる方もいらっしゃるかもしれません。そのように言葉で伝えてしまうと、その言葉の中身だけではなくて、それに伴う印象も必然的に伝えてしまっていて、それに対する聞き手の評価から逃れられないという面があり、この二つを伝えると言えるのではないかと思います。

情報の伝達で重要なことは、当然のことながら、分かりやすいのが大切だと言葉のことで言われます。「易しさ」と書きましたが、この分かりやすさの内実の一つは正確さであり、曖昧さを排するという面と、それから、スピード感を持って迅速に処理できるという面があるのだらうと思います。そういう正確かつ迅速に処理できるような分かりやすさというものが、まず一つ、言語の伝達において求められる条件ではないかと思います。

同時にもう一つ、感情の伝達で重要なのは、「やさしさ」の漢字を変えて「優しさ」としてみましたが、心地良さということだらうと思います。これは結局、すごく失礼な物言いにならず、かつ、よそよそしくない、親しみの感じられるような表現選択が求められているのではないかと思います。私自身の専門に関して言うと、情報の伝達というのが専門ですけれども、ただ、恐らく前回の話合いの様子などを伺っていますと、むしろコミュニケーションにおいて重要なのは後者ではないかという議論がなされていて、今回の発題においても後者の方に光を当てていきたいと考えています。

そして、具体的に定義と言うか、コミュニケーションの扱う対象を絞っていかないと、なかなか議論に結び付かないと思いますが、当然、広い意味でのコミュニケーションというのは、聞く、話す、読む、書くという、いわゆる4技能の全てにわたるものだらうと思います。ただし、実際の文脈の中でコミュニケーションと言われる場合は、この4技能の中でも、話すというところに集中されているのではないかと思います。すなわち、書き言葉によるコミュニケーションよりも話し言葉によるコミュニケーションが、よりコミュニケーションらしいと考えられ、同じように、理解、受け取る側、受信する側よりも、表現、発信する側の方が、いわゆる、よりコミュニケーションらしいと考えられる。つまり、一般的には話すことを中心として、コミュニケーションと捉えられるのではないかと思います。

先ほどの感情と情報ということを組み合わせて考えてみますと、結果的に、理解よりも表現、書き言葉よりも話し言葉、情報よりも感情というところで、話すということに焦点化されやすいということになるだらうと思います。そのことをざっとこの資料で表現しています。

更に言うと、狭義コミュニケーション「話す」の四つ目で、独話→対話というのを加えています。このように一方向的にお話をして、皆さんがお聞きになるというのも、もちろん、コミュニケーションだと思いますが、ただ、よりコミュニケーションらしいのは、私の話が終わった後の質疑応答であったり議論であったりするのだらうと思います。ですから、今回のお話もそこに特化していきたいと考えるわけです。

そんなふうにコミュニケーションを話すことを中心に、しかも、こういう対面の対話を中心に考えていくことになると、重要になってきそうな観点として、言語学の立場から四つほど挙げたいと思います。一つは社会言語学の観点、二つ目は話し手

と聞き手の心理的な距離の観点、そして、コミュニケーションに関わるような、社会的なルール、制約に関する観点、さらには、話すときの、その発話が持っている目的、機能といったような観点、この四つが重要ではないかと思いますので、順に御紹介していきたいと思います。

そういうことを考えると、より狭い意味でのコミュニケーションとは、他者と社会と折り合う自己を見せ、目的を達成することに収斂^{れん}していくのではないかと考えております。少し分かりにくいものの言い方かもしれませんが。要するに、資料には出ていませんが、最終的にはやはりコミュニケーションは自分の見せ方みたいなもの。例えば、この人は情報の伝え方がうまいと思われると、その人の評価が高くなるわけですし、また、この人の話し方の相手との関係の距離の取り方、適切な敬語の使い方などですけれども、そういうものを通して、この人は優れたというような評価がなされるでしょう。また、社会的な制約においてもそうでしょう。

例えば、ビジネスの場面で、1度だけ目的を達成できればよいのであれば、心理学的なすごく問題があるような方法でも達成することは可能です。しかしながら、目的達成だけを目的にしてしまうと、社会全体はすさんでいきますし、もちろん、個人と個人の関係もぎくしゃくしていきます。当然のことながら、コミュニケーションは次回もその次もあるわけです。ですから、伝えることだけが大切なのではなくて、伝えたことによる、自分と相手との関係性が重要になってくるので、その関係性をより良いものにしていきながら、かつ目的を達成できていくことが重要なのではないかと思います。

そこでまず、四つの観点を順に御紹介していきます。社会言語学の観点については、私も専門ではないので、難しいことはよく分かりませんが、非常に単純化してしまうと、何をどう話すかという面があると思います。どのように相手に伝えていくかに関して選択がいろいろありまして、その選択の仕方によって、当然その人の社会性が見えてきますし、それでまたその相手との関係性も見えてくる、そういうところを問題にする学問だろうと考えます。例えば、今、私自身がこのように皆様の前でお話をしていますが、今は私がどんな話し方をしているのか自分ではうまくモニターできません。一応、元々横浜市のより奥まった方で育ってきたということがあり、その前は関西に両親ともおりましたので、関西に行って緊張すると関西のアクセントになってしまうという癖がありますが、多分その癖は出ていないと思います。例えば、それぞれ皆様御自身の御出身とか背景というものがおありだと思いますが、背景によって生み出されるような言葉遣いがあると思います。

また、当然のことながら、今は文化庁の小委員会、会議であるという側面があります。場面というのを大きく分けると、生活場面と学習場面と仕事場面に分かれると思います。その仕事場面の中でも、こういう議論をする、それも、いろいろな立場の異なる方、ふだん顔を合わせない方が一堂に会してお話をするという場面ですので、かなりフォーマルな場面だろうと思います。それから、今私自身がこのようにしてお話ししているということと言えますと、男性であり、年代は40代後半であり、職業は研究所の教員であってというようなことが、いろいろな主体としてのものが反映されたような話し方になっているだろうと思います。

また、関係性というのも問題になります。基本的にはそれぞれ御専門をお持ちの第一人者の方がお集まりだろうと思いますが、一応立場としては、お互い対等な立場ということでお話ししているということです。個人的に親しい方も何人かいらっしゃいますが、基本的には、一応フォーマルな場面ですので、そういうところは抜きにしても、そういうお話の仕方をしているだろうと思います。ただし、全く初めてではありません、全ての方とお話をしたことがありますので、それなりの話し方になってい

るだろうと想像します。

それから、ここで果たされている目的は、今回の発表、説明、そのような私のコミュニケーションの立場と観点をお話しするということで、もちろん、基本的な説明をベースにお話ししていますが、中には、この中に挙げているような、例えば提案というような部分も含んでいるかもしれません。そういった目的を持ってお話をしているということです。

そして、この程度の空間、狭くもなく広くもない空間ですので、マイクなどは使わずに地声でお話しをしています。しかも、こういう口の字型の机の椅子の前に座りながらお話しをしています。そういう中も、当然、私自身の今の話し方に影響を及ぼしているだろうと思います。

さらには話題ですが、多少、学術的な難しい内容をお話ししているとは思いますが、異なる立場の皆様が参加されているわけですから、できるだけ分かりやすくお話ししようと思っておりますので、さほど重い話し方ではないのかもしれませんが。その辺も難しいところだと思いますが。

どのようにお話しするかということですが、どのようにというものも、それぞれ地域性、方言の専門家は次回お話しなさるのかと思いますが、そういうそれぞれの御専門もあると思いますし、地域、場面、それから、主体、関係、機能、媒体、話題といったような、こういう観点に分割してお話ししていくと、より物事が見やすくなる、整理がしやすくなるのではないかと考えます。

そのような社会言語学的な整理の前提に立って考えた場合、まず一つ、特に会話において重要なものとしては、心理的な距離が言葉に反映されるということです。それが重要なのではないかと思います。そうすると、80年代に出版されたものですが、ポライトネス理論というものが非常に重要になってくるのではないかと思います。私はその専門ではありませんし、俗流の理解ではありますが、それを分かりやすくかみ砕いて説明しますと、結局、話し手というのは、聞き手と良い信頼関係を保とうとするわけですが、二つの相反する方向性があり、一つは、心理的な距離を縮めるという方法で親しさを表現しようとし、また一方で、心理的な距離を遠ざける方法で丁寧さを表現しようとし、人間関係を良好に保とうとするものであるということです。これは私流の言い方ですが、言わばなれなれしさと、よそよそしさのせめぎ合いということだと思います。

例えば、今日は二人が発表しますが、塩田委員と私と少しやり取りをしました。そのときに、あえて「塩田さん」と言いますが、塩田さんから頂いたメールの中では、「石黒さん」という形で私にメールを下さるんですが、今のところ私は「塩田様」という形でお返ししていて、そろそろ「塩田さん」に変えようかと思っています。なぜかと言うと、実は生まれた日が3日しか違わないということが分かっておりまして、多分その辺をお分かりになって、親しさを表してくださって、「様」から「さん」へ変えているのではないかと、そして、そろそろ私もそれにお応えしてもいいのかなと。常に「先生」とか「様」という形で丁寧に表すことも、もちろん、相手に対する礼儀の表明ではありますが、それだけが相手との関係を良くする方法ではなく、反対に「様」を「さん」にすることも非常に重要なことだと思います。

どうしても日本語の昔ながらの一般的な敬語論と言うと、丁寧さ一辺倒という感じがありました。逆に「様」を「さん」にすることによって信頼関係を構築することは余り触れられてこなかったと思います。そのところで、こういう二つの親しさと丁寧さというもの、なれなれしさとよそよそしさ、そういうものも対立軸で捉えたことによって、それをまた心理的な距離、これは放送大学の滝浦さんのお考えですが、そういうようなものの捉え方によって、今までの敬語論とは異なる、より現実的な敬語論が提案されてきているのではないかと考えます。

そのことを私自身は「アクセル」と「ブレーキ」と表現していますが、これも一般の方に分かりやすくするためにはどうしたらいいかと考え、このようにしております。結局、相手との信頼関係を無理なく自然に縮めることによって、距離を、そして、信頼関係を構築するというところで、アクセルを踏み過ぎると人間関係は壊れてしまう。反対にブレーキを踏み過ぎると相手との関係が全然近くならない、つまり、アクセルを踏まないで相手のもとに近づいていかないですが、アクセルを踏み過ぎてしまうと事故を起こしてしまう。一方で、ブレーキを踏み過ぎてしまうと、相手との関係は悪くはなりませんが、一向に親しくならないという、そういう現象が起きてくるという言い方をしたわけです。

例えば、私自身の本の中にはこういう二つのキャラクター、「アクセルちゃん」と「ブレーキさん」が出てきます。その中で、例えば、今回なれなれしい感じを出そうとして例文を作ってみました。これから初めて一緒に仕事をしようとする他社の人との会合というイメージです。

「初めまして、高橋由紀で～す。〇〇商事の〇Ｌ２年目なんだ。ゆきりんって呼んでね。で、お名前は？ 白鳥春香？ わー、かわいい名前、芸能人みたい♪ 今日１日よろしくね、春香ちゃん！」

と、初対面の人に言われたらどうなるだろうということです。まあ、こういう人が好きという人も中にはいると思います。ですが、空回りしている感じが非常に強くするし、１歩も２歩も３歩も引かれるんじゃないかという気がします。

一方で今度はブレーキさんの例です。

「初めまして。私、高橋由紀と申します。〇〇商事の入社２年目です。失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいでしょうか。白鳥春香さんとおっしゃるんですか。今日１日どうぞよろしくお願いします。」

ちゃんとしている感じはしますが、警戒されているような、この人とは今日１日やっても仲良く仕事ができないような、そういう気がしてきます。

両極端の例ですが、その間ぐらいのところで落としどころを見付けられるという。もちろん、個人の性格もあるので、無理に奥ゆかしい方がこういうなれなれしい話し方をする必要ありませんし、すごく明るくて積極的な方が控え目な話し方をする必要もないわけです。だから、正解は一つではない、その人のキャラクターと相手のキャラクターを想像しながら決まっていくんだろうと思います。そういうところでうまく落としどころを見付けられることが、コミュニケーション能力なのではないかと考えています。

それからもう一つ、今のは個人のやり取りでしたが、個人だけではなく、当然のことながら、社会的なルールという制約があるだろうと思います。子供がいいなと思うのは、言いたいことを自由に言っても大体受け入れられる、子供だからということで許されます。大人の場合は、社会的なルールに反したものの言い方をすると、当然のことながら、ある種の社会的な制裁、無言の制裁のこともあるかもしれませんが、いろいろな形で不利益を被るだろうと思います。だからこそ、経団連はコミュニケーション能力の高い学生を求めるのでしょーし、３年になると就活の中で学生たちは慌てて敬語の本を読みながら勉強を始めるんだらうと思います。

でも、もちろん、敬語というのは、外国人の目から見ると、なぜ日本語はこんなに不自由なのか、封建主義的な価値観を押し付けているのではないかと、となります。確かにそういう面はないことはないと思います。もっとフランクに対等に話し合えばいいのではないかと、そういう側面もあるだろうと思います。しかしながら、こういう日本語の社会の中で生活していくと、配慮の行き届いた角の立たない言い方を上手に選択することで、かえって自分の言いたいことが言いやすくなるという、そういう積極的な面もあるのではないかと、思うわけです。

結局どんな面であっても、自分自身言わなければならないことがあって、言わなければならないときには自分の伝えたいことをしっかり伝えなければいけないわけで、言い方を工夫することを通して、自分の言いたいことも言えてくるようになるのではないか。言わば弱者の武器とも考えられて、敬語も、ある種の上下関係というものを押し付けられてしまうというネガティブな側面もありますが、それは現代社会においては、飽くまでもそういう役割を演じているときだけです。例えば、こういう場面であれば、私も一人の先生と言われる立場の者としてある程度の敬意が払われるかもしれませんが、一旦地下鉄に乗ってしまえば、背の高い邪魔なおっさんでしかないということもあります。そういうところで車内の人と会話をすると文句も言われたりすることもあるだろうと思うわけです。ですから、それは飽くまでも役割に応じたものであって、そういう役割に応じた適切な物言いが社会的には求められているのではないかと思います。

例えば、それは、ある種、身内敬語みたいなものもあると思います。日本の中では、もちろん、個人対個人の関係もあるでしょうけれども、身内を高めない、家族を高めないというのも現代のルールでしょうし、同じような意味で、社内の人を社外に対して紹介するときも、自分の上司だからと言って高めた言い方はしないというのも、社会的な制約の一つの反映だろうと思います。

結局、人間というものは、自分の意見をどこまで出すかということと、相手の意見に対してどこまで譲るかという、常にそういうような、対立する部分だけではもちろんないわけですが、共感するような、いわゆるおしゃべり、今回おしゃべりは特に対象にしていますが、そういうものもあります。実際はこういう会議などでもそうですが、自分の意見と他者の意見をどうすり合わせていくか、歩み寄りが重要なのではないかと思います。

ですから、円滑なコミュニケーションというのは上意下達的なコミュニケーションではなくて、お互いが言いたいことを、主張すべきことをきちんと自由に交わせることが重要なのではないか。そう考えると、取りまとめのときに気を付けなければいけないのは、現在、社会的な権力を持っている50代、40代、私のような年代の者が、何だかコミュニケーションとはこうあるべきだという議論を組み立てて、若い人たちはそれに従いなさいみたいなことをすることで、それは非常にまずいのではないかと思います。そうしたものは、かえって、ハラスメントの温床にもなりかねませんし、非常に大きな同調圧力みたいな、日本社会においても一面的なものが随分進んできているような気がしますので、やはり多様性を重視したコミュニケーションという姿を求めていく必要があります。少なくとも言葉の暴力につながるようなことは、ある種、注意を喚起することが必要なのではないかと考えます。例えば、あるコマーシャルで、「お断りします！」って言えたらなあとか、「苦労は見せるもんじゃない」と聞こえるように言ってみる」とか、このような、大きな文字で表されるものと、小さな文字で表されるようなものがセットになるような形で、私たちは心の中で葛藤しながらコミュニケーションしているのかと感じます。

最後ですが、そうしたものを最終的にまとめていく場合、発話機能というものが重要になってくるのではないかと思います。今回の関係形成型というような、話すこと自体を目的としたような、社交を目的としたような雑談は今回扱わないことにして、ある目的を達成するようなものを典型的なものとして考えると、感謝、謝罪、指示、依頼、受諾、断り、提案、相談といったような様々な機能が問題になってくるのではないかと思います。そういうようなものによって整理していく必要があるのではないかと考えます。

時間がないので具体的な例をお示しします。お礼を言うこと、例えば、誰かから本をもらった場合、もちろん、直接、ありがとう、感謝します、お礼申し上げます、と

いう言い方もできます。しかし、2007年の「敬語の指針」をまとめるときのメンバーだった蒲谷宏さんがおっしゃっていることですが、例えば、お詫びという形をとってお礼を言う、済みません、申し訳ありませんと言って、ありがとうということを表明することももちろんできるわけです。あるいは、御恵贈とか、温かいお心遣いとか、助かりますとかいうような、恩恵があるという言い方で表すこともできますでしょうし、具体的な感想、読みやすかったです、勉強になりました、心に響きました、周りの人にも勧めたくなる面白さですなんて言われると、上げた方はうれしいです。

一方で、いやあ、ありがとうございます、きれいな装丁ですねー中身はどうなんだ、時間ができたら読んでみますーできなかつたら読まないのね、参考にさせていただきますー読まなくても読めるコメント、コピペだなと。取り急ぎお礼までー取り急がれちゃったというようなこと。つまり、ある種、褒めたところが皮肉になってしまうということも、当然、コミュニケーションの中では起こり得るわけです。こういうことにも当然、逆に別の意味にも取られかねないということ、お礼を言ったつもりなのにというすれ違いも起こる可能性もあるので、こういったところも気を付ける必要があるだろうと思います。具体的な事例については、次の塩田委員のところからいろいろ出てくると思いますので、そちらにお任せいたします。

以上、まとめますと、コミュニケーションと言った場合、今回の発表の中では、感情の伝達を重視した話し言葉、話すことを指していて、そこに焦点化するのが分かりやすいのではないかと、思います。二つ目は、コミュニケーションには正解はなく、いろいろな条件の下、組み合わせながら最適解、最善を求めていくという考え方なので、そういうものが示せるといいなということ。三つ目としては、話し言葉のコミュニケーションを考える場合、社会言語学や、ポライトネス理論に表れるような心理的な距離とか、あるいは2000年にまとめられた「現代社会における敬意表現」の際に、井出祥子さんという座長の方がいらっしゃいましたが、その方がおっしゃる「わきまえ」という社会的な制約であるとか、先ほど申し上げた発話機能であるとか、といったようなものを中心とした整理をしたらよいのではないかと思います。もちろん、これは私自身の一面的な御提案に過ぎません。コミュニケーションというのは多面的なものですので、様々な御立場からの御意見が寄せられることを今後期待したいと思っています。

今回準備をするに当たって、先ほど申し上げた「現代社会における敬語表現」を確認しましたが、非常によくできているものでした。それを意識しながら、その二番煎じにならないようにどうすればいいのか。またその後、敬語に特化したものですが、2007年の「敬語の指針」も非常に有力なものですので、また、それをある種コミュニケーションという観点から差別化を図っていくことが重要だろうと思いました。

また今回、機能ということでリスト化を提案しているわけですが、場面について、例えば学校、企業、役所、病院、メディアなど考える必要があるでしょうし、媒体のリスト化も考えられるでしょう。さらには、人称表現、先ほどの「石黒さん」ー「塩田様」のような問題など。さらには、いわゆるハラスメントとか、ヘイトスピーチとか、いわゆるモンスターなども問題になっていますが、そういうコミュニケーション上の社会的な問題をクローズアップする可能性もあるのではないかと思います。そういうところで、終わらせていただきます。

○沖森主査

どうもありがとうございました。では、石黒委員による御発表について、質問を受けたいと思います。何かございますでしょうか。

○鈴木委員

初めの方にお話いただきました、経団連の調査に関連したところですが、新入社員に求める能力の第1位が12年連続「コミュニケーション能力」ということから、この検討の議題となったということもあると思います。コミュニケーションということについてどれだけ期待しているか、つまり、かなり期待している人と、ほとんど期待していない人ということがあるだろうと思います。そういう人たちに対する見方を、今のお話ですと、期待するレベルの差という捉え方を石黒委員はしていच्छやるという理解でよろしいでしょうか。

○石黒委員

期待しているレベルの差、もちろん、レベルの差というものもあると思います。

○鈴木委員

確かにレベルという言葉が適切かどうか分からないですが。

○石黒委員

ただ、置かれた立場によっては、コミュニケーション能力も全然違うと思います。営業職に求められるコミュニケーション能力と、社内を中心としたような会議とか人事とか、そういうことに求められるようなコミュニケーション能力と、あるいは工場などの現場で適切な指示を出すという、前回も挙がっていたような、そういうコミュニケーション能力などとは全然違うと思います。ですので、それぞれ求められるものは違うということは、レベルという言い方は、うまく私が答えられているかどうか分かりませんが、そういうことを想定しています。

○沖森主査

よろしいでしょうか。後で全体の議論ということになりますので、一旦ここで石黒委員による御発表を終わりにさせていただきたいと思います。

○塩田委員

1点だけ。石黒委員は謙虚なのでおっしゃいませんでしたが、アクセルちゃんとブレイキさんは、名著『心を引き寄せる大人の伝え方集中講義』（サンクチュアリ出版）に載せられています。

○沖森主査

それでは、次の発表をお願いしたいと思いますがよろしいでしょうか。配布資料3に基づき、塩田雄大委員から、これまでの調査データや具体的な問題を中心に、コミュニケーションの在り方についてのお考えを御発表いただきます。お忙しい中、御準備くださいまして、誠にありがとうございます。では、よろしくお願いします。

○塩田委員

塩田です。よろしくお願いします。立ったまま失礼いたします。取るに足らない内容をお伝えしますが、どうかお許してください。…というように、日本語では謝罪から会話に入っていくのが一つのお作法になっていると言われることがあります。これは余りほかの国にはないと思います。日本では謝ってから入るのが、今のところのスタンダードというかお作法なわけです。こういったお作法が日本語では、日本の社会ではどうなっているのかをきちんとつかんでいくことが大事なんじゃないかということ、日本の中、あるいは日本に來ている外国人に対してはどうするのか、日本語教育を受けている学習者にはどうするのか、あるいは日本語自体どうしていくのか、

このままでいいのか、あるいはもっと変えていった方がいいのかということも含めて議論をできたらと思います。

今日は、たった一つの言語表現をケーススタディーとしてお伝えします。私は、こういったものはどれが正しい／正しくないではなくて、「相場」だと思っています。今の相場がどこにあるかを把握しておく。もしかしたら10年たったら相場は変わるかもしれません。正しい／正しくないではなく、今の相場がこの辺りにあるということ調査を通じて、恐らく文化庁でまた今年も調査をなさると思います、もしかしたらそこで取り上げられるかもしれませんが、調査というのはそのために、つまり、未来永劫、これが正しいということではなくて、相場をつかむためのものですので、その一つのケーススタディーとして御紹介をするということです。

内容としては、先ほどの石黒委員の内容と路線が全く同じで、当然、何かを押し付けるものではなくて、ただ、押し付けるものではない一方で、我々大人としては、今の相場がどの辺りにあるのかを若者に選択肢として提示してやる必要があると思っています。その選択肢を持って、採用するかどうかはあなたが判断しなさいと。何も方向性を示さずにいるのではなくて、一応今の相場はここにある、こういう言い方をしたら大人は嫌がる、こういう言い方をしたら大人にある程度尊敬されるということモデルとして示しておく必要があるだろうと思います。それが絶対正しいのではなくて、相場感を示してやるということだと思っています。

例えば、日本人の英語は冷たく聞こえると欧米の方から聞くことがあります。それは、“Hello”とか“Good morning”と言うときに相手の名前を言わないんです。日本人が英語を話すときには“Hello, Jack”とか“Hello, Take”と余り言わない。名前を言わないということは非常に冷たく聞こえると言うんですが、これは日本人にとってなかなか理解できない感情なんですね。私たちが外国人から日本語を話すときに受けている印象として、感じが悪いとかいうことがあるのは、彼らはそういうお作法を知らないからそのようにしているだけで、私たちも英語をしゃべる機会があるときには同じようなことをやっているんです。

ですから、注意深くそういうことは探っていかないといけない。それは年代差もあって、例えば、非常勤として大学で教えていますと、学生が「遅れました。」と言っていきなり入ってくる。しかし、日本の社会では、遅れたり謝罪するときには理由が必要です。電車が遅れたとか、朝どうしてもおなかが痛かったということです。あと、例えば、メールで、「先生、この言葉は副詞と考えてもいいのでしょうか、教えてください。」と言うときも、それなりの理由が必要です。何に使うのか、塾で教えるから必要なのか、レポートで必要なのか。ただ、これが文法という側面から行くと、「教えてください」は文法上は間違っていないんですが、運用上やや問題があるわけです。現代の相場としては、何か相手に聞くときには理由が必要だというのは日本の社会でのルール。恐らくほかの国ではそうでない国もあるでしょう。要件だけ言って、別に理由を言う必要のない社会もあります。そういった中で今日のお話をしたいと思っています。

今日お話しするのは、「させていただきます」という言い方についてです。これについては、私の理解だと、「広い意味での文法」と「狭い意味での文法」という言葉があると思っていますが、広い意味の文法としては別に間違った表現ではない、どんな使い方をしていても間違っていないのです。

その中で、文法というものを統語的な面と、運用上の面で見ると、統語的な面では何ら問題がない表現だけれども、運用上の面で、こういう場面で言うのはよくないとか、こういう言葉についてはよくないという問題として挙げられて、今回の「させていただきます」には実は二つの問題があります。一つは、さ付き言葉（さ入れ言葉）と言

われるように、「行かさせていただきます」など、本来「さ」が必要ないところで「さ」が入るという、これは統語上の問題です。狭い方の文法の問題ですが、今回やろうとしているのは運用上の問題、感じがいい／悪いということを前回お話ししましたが、それについての調査結果を分かっている範囲でお伝えしようと思います。

まず、そういった問題は文化庁でも長らく追究してきました。例えば、私が把握している限りでは、平成9年1月調査で、この「させていただきます」の中で、「気になりますか／気になりませんか」ということで、「ドアを閉めさせていただきます」は「気にならない」が多いです。あと、「会議を終了させていただきます」これも「気にならない」が多い。そのほか「明日は休業させていただきます」、「値引きさせていただきます」。この四つが、「させていただきます」が「気になるか／気にならないか」というレベルの問いです。

次が平成20年です。「これで会議を終了させていただきます」、「今月末で休業させていただきます」、「コピーを取らせていただけますか」この三つですね。この「取らせていただけます」になると多少違和感が多くなる。4番目はいわゆるさ付き言葉（さ入れ言葉）です。「休まさせていただきます」、これは感じがいい／感じが悪いの問題ではなくて、「さ」が要るか／要らないかの話です。

文化庁の調査は非常に規模が大きく、私たちの研究所での調査より1.5倍か2倍ぐらいの人数に聞いています。今回私どもの方では「させていただきます」について、資料でお示したような感じのものをやっています。

「店内は禁煙とさせていただきます」と「しております」。「コメントは差し控えさせていただきます」と「差し控えます」。「明日は休業させていただきます」と「休業いたします」。「5%の値引きをさせていただきます」と「いたします」。選挙のときに使う「私はこのようにお訴えをさせていただきました」と「いたしました」。「明日は営業させていただきます」と「営業いたします」。「感動させていただきました」と「感動いたしました」。「手作りのチョコを渡させていただきました」と「渡しました」。

この八つについて、それぞれどう感じるかを示したんですが、選択肢は次のようになっています。まず、選択肢を六つ示しました。一つは、「aの方が感じがいい」、つまり、「させていただきます」の方が感じがいいで、「いたします」とか「します」の方が感じが悪い。イはその反対に「します」「いたします」の方が感じが良くて、「させていただきます」は感じが悪い。ウは、両方ともいいけれども、どちらかと言えば「させていただきます」の方が良い。エは、どちらもいいけれども、「いたします」の方がいい。オは、両方とも差が付けられない、カは、両方とも感じが悪いという形の選択肢で全て聞いています。

ここで私なりに考えた分析の視点ですが、まず一つは、一般に「させていただく」というのは、聞き手にとって迷惑となったり我慢を強いたりするような行為や行動であった場合に選ばれるものである。例えば、「ちょっと拝見させていただきます」、「お邪魔させていただきます」のように、その行動が何らかの迷惑であったり我慢であったりするときに使われるのが、本来の用法です。許可を求めているわけですから。私がそのようにすることを許可していただくという形なので。そうすると、そういった元々の用法から考えると、やはり迷惑や我慢に関連しない場合には、素直な言い方、「いたします」とか「します」の方が好まれるのではないかと。つまり、本来はそうだったけれども、用法がどんどん拡張しているから、余り迷惑や我慢に関係しない場合には素直な言い方が好まれるんじゃないかというのが一つ。

もう一つ、それに対して、少し社会言語学的な観点が入ってきますが、若い人は「させていただく」を用いた表現を余り好まない、あるいは好まなくなっているのではないだろうか、年代差があるのではないかという一つの仮定。もう一つは、地域差があ

るのではない。当然、個人差はありますが、個人差とは別に、地域によって、こういう言い方を好む地域と好まない地域があるんじゃないかということです。つまり、日本語は一つではない多様なものなので、地域差があるのではない、この観点から見てきました。

具体的に数値を見ていきます。まず、「禁煙としております」と「させていただいております」。感じがいいのは、数値は、「しております」が11、「させていただいております」が43、どちらかといえば「しております」が6、どちらかといえば「させていただいております」が31で、同じくらいが8です。「させていただいております」が一番多く、これは感じがいい。「しております」は感じが悪い、これについてはこういう数値でした。

「コメントは差し控えさせていただきます」と「差し控えます」について、一番多いのは、「差し控えさせていただきます」。

「休業いたします」と「休業させていただきます」。多少「休業させていただきます」の方が多いです。今までのものは、「させていただく」が良く、「いたします」を良くないと言っていたけれども、「休業」の場合は、どちらかといえば「させていただきます」が少しだけ上回る。

「5%の値引きをいたします」と「させていただきます」は、やはり「させていただきます」です。後で述べますが、値引きしたら普通買う人は得します。別に迷惑になったり、我慢したりするわけではないので、本来の用法からは多少外れています。これが例えば、「5%の消費税を加算させていただきます」だったら問題ないと思いますが、値引きとなると普通は得するわけで、やはりこれは本来の用法ではありません。そうすると、多少上回る、けど、これが圧倒的というわけでもありません。人によって、相当考えが違う。

「営業いたします」になると、「営業いたします」が一番多いです。先ほどよく似た表現で「休業いたします」というのがありましたが、「休業いたします」と「営業いたします」で数値が違います。よくよく考えてみると、休業というのは、お店に来て休んでいたら迷惑です。けど、営業するのは別に迷惑ということは普通はありません。普通は、来て、あるいは来ない人にとっては、「営業させていただく」というのは、本来何ら関係のないことです。休業に比べると、営業というのは、数値が「営業いたします」というか素直な言い方に偏ってくるんですね。

「お訴えをいたしました」と「させていただきました」。これになると、これは実は両方とも感じが悪いというのが意外と多いですが、「お訴えをいたしました」が一番数値が多いです。

「感動いたしました」。スポーツの場面や何かですね。感動というのは、普通は自然に発露してしまうものであって、抑える必要もないわけで、また、その人が感動したからと言ってこちらが迷惑を受けたりはしません。そうすると、「感動いたしました」に相当集中してきます。

「手作りのチョコを渡しました」と「渡させていただきました」、これは圧倒的に「渡しました」に集中します。これも特殊な場面を想定すると、多少数値も変わってくるはず。例えば、その恋人のお父さん、お母さんに、あなたの息子さんに手作りのチョコを渡させていただきましたというのであれば、多少、違和感が和らぎます。お父さん・お母さんの許可も得ずにそんなことをしてしまいましたという。けど、これは一般的な、何の文脈もなしでいくと、こういう場面で「渡させていただきました」と言うのはよろしくないと思う人が多いということです。

では、全体的に今の数値をもう一回見てみます。まず、迷惑・我慢に関連しない場合には、素直な言い方が好まれるのではない、**「させていただく」**の方を使ったものの支持率を並べてみましたが、上の方が高い、だんだん低くなります。実際の設問

はランダムに並び替えて出しているのです、この順に出したわけではありませんが、これは多い順に並べ替えてあります。

こうして 18 ページを見てみると、「禁煙とさせていただく」、これは確かにたばこを吸わない人にとってはむしろうれしいことですが、たばこを吸う人にとっては我慢しなきゃいけないということで、「させていただいております」を使うことが一番支持されています。「コメントを差し控えさせていただきます」、コメントを聞きたいからみんな来ているのに言わないということは、やはりそれは迷惑であったり、我慢であったりする。ここに集中する。休業も、先ほど申し上げたとおり、せっかく買い物したかったのにやっていなかったというのは迷惑なわけで、こうなる。

それに対して、ここから下は、普通の文脈では余り迷惑ではない、余り我慢ではないです。値引きもそうですし、営業もそうです。訴えるのは別にそれは勝手に訴えればいいし、感動というのも別にそうでもないし、チョコを渡すのは迷惑ではないですね。こういうように、やはり迷惑や我慢に関係ない場合は、ここの支持率がやや低くなります。

同じように 19 ページ、素直な言い方の方、「いたします」、「します」の方です。やはり上の方、迷惑や我慢に関連する場合は、こちらの支持率が非常に低くなります。それに対して下の方が高くなってきます。つまり、迷惑や我慢に関連しない場合には素直な言い方が好まれるということはある程度確認ができます。

次に、年齢差を考えてみようと思います。ここで多少数値を整理して、「しております」が良い、「させていただいております」は感じが悪いという人と、あと、「どちらかと言えば「しております」」の方が良いと、「同じくらい」、この三つの数値を足して、「しております」支持派という形で再集計してみました。そうすると、「しております」支持派、禁煙については、全体で 24%が「しております」、素直な方の支持派でしたが、年代別に見るとそんなに違いがありません。禁煙については、さほど年代差が出ない。

次に、コメントについては、全体は 26%ですが、60 以上の層だけ多少高くなります。ほかの問題と比べて多少特殊です。コメントについては、60 以上の方が素直な言い方の方が良いという率が高くなっています。これはこの問題だけが特殊で、実はほかの問題は、休業について言うと、若い人の方が素直な言い方が良いと言っています。20 代は、「休業させていただきます」なんて言う必要ないという人が多い。値引きについても同じように、やはり若い人の方が素直な言い方を好む。お訴えについても同様です、若い人の方が素直な言い方を好む、営業についても同じです。20 代は 68%です。感動も同じです、圧倒的に 95%で、感動させていただきましたというのはいかたがうという人が多い。チョコを渡すも、これはほとんど、どの年代でも振り切れそうなほど集中していますが、みんなそこに集中しています。

これについては、若い人はこういう言い方を好まなくなっている、あるいは好まないのではというのはある程度確認できる。これが実は「ある程度」と書いたのは、現状がそうということは、解釈が 2 通りあって、一つは、今後、「させていただきます」が衰退していくという考えです。今の若い人が今の考えを持ったまま大人になっていく、変化せずにそのまま大人になっていくと、日本の人口の大部分は今の若者と同じ考えになってくる、あるいはもっと激しくなってくる、となると、「させていただきます」が衰退してくる、これが一つの考え。

もう一つは、社会に入ると彼らも考えを変えるという説です。どちらになるかは正直言ってまだ分かりません。ただ、私は、どちらかと言うと後者の方が可能性が高い気が何となくします。つまり、20 代の人であっても、社会に入ってもまれていくと、多少「させていただきます」が増えてくるんじゃないかなと、この調査結果だけではそれはまだ言えませんが、感覚的にはそんな印象を持っています。今後とも「させて

いただきます」は使われ続けていくのではないかと考えております。

最後に地域差ですが、素直な言い方を支持する「いたします」派の方を、全国と、北海道、東北、関東、関西をピックアップしましたが、まず、北海道は「禁煙としております」という素直な言い方を好む率が多少高いです。東北も多少高いです。次に、「コメントは差し控えます」は東北で多少高いです。休業も多少高いです。東北の人は「休業させていただきます」とは余り言わないというか、余り好まないというか、さほど好かれていないようです。「営業させていただきます」も東北では余り好まれない。あと、「値引きをいたします」については、関東での支持率が多少高いです。では反対に、関西では「禁煙としております」は極端に低い。こういう場合には「禁煙とさせていただきます」と言うべきだという人が多い。「値引きをいたします」も低い、関西では「値引きをさせていただきます」と、「させていただきます」の方が支持率が高い。「営業いたします」も関西は低いです。

元々、「させていただきます」自体は、確実に分かっているとおり、関西起源の言い方です。昭和初期頃に、私の見た例で言うと、昭和9年だったか、銀座の喫茶店に、「閉店させていただきます」という張り紙があったのを、永井荷風が確かそれを記録に取って、こんな張り紙があった、珍しいという例で記録するぐらい、まだ昭和初期の東京では余りなされていなかったようです。ですが、見ると、大阪の新聞とか神戸の新聞では、大正時代の例がいっぱい出てきます。というように、かつて関西から全国区に出てきた言い方なので、関西では特に好まれている、逆に言うと、素直な言い方は関西では総体的に支持率が低いということになっています。つまり、地域差は確認できるということになります。

以上、何のオチもないのが私の今日の発表でございました。

○沖森主査

どうもありがとうございます。御質問等ございましたらお受けしたいと思います。ただ今の塩田委員による御発表についての御質問は何かございますでしょうか。

○川瀬委員

「させていただきます」論は、私がアナウンススクールで教えているときにも、学生が余りにも使うので、普通に話していいんだよと言っていました。彼ら自身が好まないということと、相手に対するおもんばかりで多用してしまうということは、共存というか、両方起こり得る事態ですね。

○塩田委員

まず、敬語というものの定義で、敬語というのは相手を敬うための言葉であるという、古くさい定義は、これは全く違うと思います。分かりやすく言うと、相手を敬っている振りをするときに使う言葉というか、敬語というのは本当の本心が出ているわけではありません。社会的に、この場ではこういう言葉を使うのがお作法であるというのが定められていて、「させていただきます」自体は、若い人はふだん使っていないけれども、就職対策とかで、こういう言い方をしなさいと言われてたり、あるいはほかの人が言っているから言わなきゃいけなかったりということで、過剰適応してしまっています。「サークルで部長をやらさせていただきました」って、私たちからすればおかしいんだけど、使い慣れていないから、手加減できていないというか、きちんとしたところで止まっていません。

○川瀬委員

ある程度、適度感を提示するのもすごく大事だと思いますが、コミュニケーション

として、そこはおかしいと言うのも、ある程度は出していくことは必要ですね。

○塩田委員

ええ、そのように思われますよということは出してもいいかと思います。

○川瀬委員

もう一つ。「させていただく」と「おります、いたします」を比較されていますが、例えば、「おります、いたします」ではなく、「です、します」だったら、もっと忌避感は強くなるのでしょうか。

○塩田委員

違ってくると思います。

○川瀬委員

例えば、「この店は禁煙です」とか、「休業します」、それだと、もっとぶっきらぼうに感じられるのでしょうか。

○塩田委員

そうですね、多少何かドキッとしますね。現状としてはそうだと思います。教室とかだったらそうかもしれませんが、商業施設だったら、もう多少、「いたします」ぐらいが標準的じゃないでしょうか。

○川瀬委員

そうすると、先ほど石黒委員のお話にもあった、場面ごとのシチュエーションで必要とされるコミュニケーションと、その相手と心を交わすために使うための言葉というのは大分違ってくると考えていいですか。

○塩田委員

はい、違うと思います。

○沖森主査

ほかに質問ございますでしょうか。（→ 挙手なし。）

塩田委員、御発表どうもありがとうございました。

それでは、引き続き、本日のお二人の御発表をきっかけといたしまして、コミュニケーションの在り方、言葉遣いの問題について、どのような枠組みで今後考えていくか、あるいはどのような具体的な問題を取り上げるべきかなど、御自由に御意見、御感想を頂きたいと思います。よろしくお願いします。

○森山副主査

先ほどの塩田委員のお話の中にあった、迷惑・我慢に関連しない場合に素直な言い方が好まれるのではないかというのは、本当にその観点というのは大切だと思います。迷惑・我慢というものと、聞き手との関わりというのも結構大切で、18 ページのスライドですが、「店内は禁煙とさせていただきます」が 43% 好まれるのですね、それに対して「5% の値引きをさせていただきます」とか「サービスをさせていただきます」というのは、迷惑・我慢ではないですが、特に関西弁ということもあるかもしれませんが、私の語感では、全く問題がない表現だという気がいたします。

それに対して、確かに「感動させていただきました」というのはすごくおかしいで

すが、例えば、先生の作られた映画を私が拝見したような場合ですと、先生の映画に「感動させていただきました」というのは全く問題ないと思います。そういう点で、迷惑・我慢という観点で上の三つはくくられるわけですが、同時に聞き手との関わりというのがもう一つ大きな要因としてあります。それがない部分の、ただ単に感動するとか、恋人にチョコレートを渡したみたいなのが低いのと、ここもまた大きな段差があるのではないかと思います。

そういう点で、コミュニケーションの問題というのを考えていくときに、状況の問題は非常に大きいわけですが、迷惑・我慢という枠組みだけではなく、ある種の利害関係ということ、それから、必ず聞き手でないといけないというのも大きな問題だと思いますので、対者関係、話し手・聞き手関係でのコミュニケーションというのが非常に大きな問題になってくるのではないかという気がします。半分質問みたいな形になりますが。

○塩田委員

御指摘のとおりで、そこを全て飛ばしています。聞き手との関わり、場面というのは、絶対前提条件として必要です。ですから、先ほど、チョコレートの話で、こういう状況を考えれば多少オーケーというのはありましたが、そこは強調してし過ぎることはないと思っております。

○川瀬委員

やはり総論で行くのか、それともある程度場面とか世代とかの各論に落とし込むのかというのは、すごくこの先重要になってくると思います。総論という意味では、石黒委員のお話しになったアクセルとブレーキ、人の気持ちと通じ合うため、情報を伝えるため、感覚を共有するために、どういったアクセルがあり、どういったブレーキを踏むのがコミュニケーションにとって最適なのかという定義付けみたいなものは必要な気がします。

その上で、どのように世代や場面によって事例を挙げて役に立つものを出していくのか、これはやはりすごい論理になってきます。すごく楽しみだなという感じもしますし、一体どこからどう手を付けて整理したらいいのかというのは、前回もお話を伺っていて思いました。総論だけでは見ている人も、うんそうだよね、そのとおりだよ、じゃあ、どうしたらいいのというところをやはり期待してくると思います。ただし、じゃあどうしたらいいのというところばかり強調し過ぎると、世の中にたくさんある研究や、しゃべり方、コミュニケーションのハウツー本みたいなものと同じになってしまうでしょう。この文化庁でやっている意義を考えると、やはりその辺のバランス、落としどころ、着地先を見極めるというのはものすごく大事になってくると思います。

○沖森主査

2年掛けて指針のようなものを出すという、これがどれぐらいの分量なのかということと関わってはくるかと思いますが、そこはまだ十分見通しがあるわけではありませんで、それについても御意見を頂ければと思います。

○納屋委員

今日、石黒委員と塩田委員のお話を伺い、コミュニケーションの面白さがよく分かりました。そして、施策としてどう取り組むかが、ここでの話題になると思います。

まず、お願いが一つあります。「国語に関する世論調査」で、非対面のコミュニケーションにおいて、どんな影響が出ているのか調査をしてほしいのです。6月20日の

小委員会の参考資料4「「国語に関する世論調査」におけるいわゆる「コミュニケーション」に関する問い（抜粋）」に、国語に関する世論調査の質問項目が出ております。武田国語調査官が、今回は非対面のコミュニケーションについても課題になると言われましたが、ここには一つもそれに関わる質問事項はありません。だから、今まで情報機器の発達の段階があっても、そこでのコミュニケーションの影響が調査結果に反映されていないのではないかと思います。

私の周りの人々の話を聞いていますと、ある人はハンドルネームを使って情報機器でやり取りをすることがあると言うのです。これからの社会ではそういうことも起こってくるではありませんか。しかも、驚いたことに、複数のハンドルネームを使っていて、それでやり取りをしているというのです。聞いてみますと、そのような状況で言葉を使うことに非常に緊張を伴うと言っている方もいます。とすると、石黒委員と塩田委員のお話にあった、面と向かってのコミュニケーションの在り方と違うだろうと思うのです。これからの世の中は、人とロボットのコミュニケーションということだってあり得ると想定すると、その中でやはり非対面のコミュニケーションに関することも質問する必要があると思います。

○武田国語調査官

ありがとうございます。例えば、インターネットを通したコミュニケーションなどについて、全く尋ねていないわけではありません。ただ、コミュニケーションの問題に特化しての質問は、確かに薄いところがあると思いますので、今年度の調査の中などに是非取り入れていただきたいと思います。

○納屋委員

次に中身のことについて、これでいいのか分かりませんので、是非皆様方から御意見を頂きたいと思っています。仮の名称ですが、「言葉憲章」のようなものを国語分科会として発表することができるならよいのではというのが私の意見です。言葉憲章については、この分科会で日本語の問題について、いろいろと参考になる指針などを出してきたように、今回取り扱うのにはちょうどいい時期ではないのかと思います。

その理由ですが、「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第4次方針）」の目指すものが、文化芸術資源で未来をつくる－文化芸術立国を創出するときに、文化の力を使いたいということを明確に言っています。その中の「国語の正しい理解」で、言葉は意思疎通の手段ということを言っています。意思疎通の手段、正にコミュニケーションの在り方のことを言っているのですから、表現の自由を妨げない形で出せるなら一番よいと思いました。

○山元委員

前回お休みしまして、話の流れに乗っていかれかどうか心配ですが、コミュニケーションの問題に切り込んでいくときには二つあると思います。

一つは、今回の「させていただきます」の御発表のような、この言葉はどうかということの延長上に、使う場面とか、相手とか、そういったことを分類して出すという、ピンポイント的なやり方。

二つ目は、これがどうかなと思い提案していますが、先ほど川瀬委員のおっしゃった総論の部分の枠組みをまず作って、その枠組みの中でこの言葉はこうだというふうに持っていくやり方。

その二つ目のやり方について。コミュニケーションというのは文化だと思います。その社会、経済界、国際社会、コミュニティなど、そういった社会の中で、何が適切なコミュニケーションなのか決まっていくところがあると思います。ですから、コ

コミュニケーションの層を経済界や組織でのコミュニケーション、地域やコミュニティー例えば地震があったときに避難所に集まって、物資が来た、そうしたときにどういう順番で誰がどうするか決めていくような、そういう地域コミュニティーのコミュニケーション、それから、国際社会のコミュニケーション。この三つぐらいのエリアをまず立てておいて、そのエリアの中で、こういう言葉遣いとか、こういった人間関係の作り方とか、そういったものの事例、最適解を示すという、枠を示してピンポイントでやる方向。「させていただきます」というような事例をまず挙げて、それが国際社会の場合とか、何とかな状況の場合というように広げていく方向。そういった2方向があるかと思いました。

これまでのいろいろな報告書は、敬語とか言葉遣いとか、そういうピンポイントの規範性というようなものを明らかにしてきたかと思います。コミュニケーションの場合は、情報の伝達などよりも、他人と自分で考えを共創していく、一緒に作っていくといった面を重視し、そこに情感が共有されという基盤を重視したいと思います。それが言葉遣いという議論になると、なかなか記述できないというジレンマも感じています。

○関根委員

この議題になってから、経団連のコミュニケーション能力の調査に、必ずそこに戻りますが、石黒委員の御発表の中に、円滑なコミュニケーションとは自由に意見を交わすことであって、上意下達をスムーズにすることではない、とありました。私も賛成ですが、もしかしたら、経団連の思惑としては、むしろ上意下達をスムーズにする、そういうことが念頭にあるのかなと思いました。経団連に対して何か詳しい聞き取りはしていないですね、あの調査におけるコミュニケーション能力が何かというのは。何かその辺りの調査も必要かという気がしました。先ほどの各層とか場面において求められるものは違っているという点からも、もしかして経団連の言っているコミュニケーション能力と全然違うものを我々は出してしまうのかもしれないし、もしかしたら出すべきなのかもしれないし。まず、その辺も調査なり聞き取りなりしていただいてもいいのかなと思います。

もう一つ。石黒委員が最後に「現代社会における敬意表現」と「敬語の指針」との関係性に触れられましたが、私もこの二つとどのように関係を持っていくのかと前から思っていたものですから、今の段階でこのようにやっていったらどうかと何か思っていることはございますか。

○石黒委員

二つのコメントにお答えしたいと思います。

最初の方ですが、私もそうかなというか、全体が多分、コミュニケーションのイメージは個々の企業によって違うと思いますが、ただ、たまたま私がこういうことを強く言うことになった背景は、多分経団連に入っておられるある企業の方と共同研究をしていて、その方が、上司のコミュニケーションに問題があると強くおっしゃったのです。具体的には、クラウドソーシングと言って、インターネット上のハローワークのような、いろいろな仕事を示して、そこに一般の方が応募するという形態があるのですが、その中で、会社の上司が部下や関連会社に対して、言葉が足りなくても、相手に転嫁し、相手が理解できないことが悪いということにして、何とか説明できたようです。

ところが、全く関係ない第三者が、この仕事はどういう仕事で、どれぐらいの期間が掛かって、そのためには何が必要でといったことを条件として書く場合の能力が、人によってものすごく差があると。つまり、仕事を外部化しようとしたときにその人

の能力が直に表れて、結果として、むしろ日本企業の問題は、そういうような仕事を出す中間管理職の側にあるということを強くおっしゃっていました。

もちろん、そういう上意下達的なコミュニケーションを求めている人も中にはいるでしょう。一方でむしろ若い方ではなくて、そういった仕事を管理される方にも結構問題があるとおっしゃっている方もいらっしゃるようです。私はむしろこちらの方が重要かという気がしています。ですから、おっしゃるように、この内実はどういう形であれいろいろな方に聞いていって、求められているコミュニケーション力は何かということ、アンケートよりもインタビューの形で質的に掘り起こしていくことは、おっしゃるとおり重要かと感じています。

それから、先ほどから議論になっている、山元委員からもありましたが、総論形式でいくか、各論形式でいくか。川瀬委員の御意見からも端を発しているように思いますが、とても難しいです。どっちから行くかということですが、多分、総論でいくと、2000年の「現代社会における敬意表現」と2007年の「敬語の指針」、二つの報告とかぶってしまうだろうという気がしています。2007年は各論的なこともあります。私は今日の塩田委員の御発表にあったような、もちろん、「させていただく」だけに特化するわけではありませんが、ある程度具体的な事例を丁寧に掘り起こして議論する必要があります。かと言って、文化庁がやるものですから、事例紹介だけではおっしゃるようにハウツーになってしまうので、そこにある骨太の背景を示すという具体的な部分と、抽象的な理論との行ったり来たり、往還をしっかりとっていく中で鍛えられていくものかと考えます。

○納屋委員

この問題を扱い、課題を決めていく段階で、こんな議論がありました。文化庁で「言葉シリーズ」を発刊していたことですが、「平明・的確、豊かで美しい言葉」の普及・定着ということを目指してやっていきましようと呼び掛けていたのではないのでしょうか。これは私が教員生活をしている中で、心を耕してくれたし、方向性も与えてくれていて、大変役立ちました。今も役立っていると強く思います。

また、課題の検討は東日本大震災の後でしたので、分かりやすさということも大事だということがありました。石黒委員がおっしゃった、分かりやすさの議論はそのときから出ていました。文化庁では、現在でも国語施策を進める上で「平明・的確、豊かで美しい」という言葉の使い方をすることは変えていないだろうと思います。ただ、それだとかかなり抽象度が高いので、そのように言っているだけでよいのかと思います。

ですから、皆さんにどうも議論をしていただけないので、もう少し手短かなことで言うと、そんな議論があり、その延長上で、入部委員、石黒委員、塩田委員それぞれ、コミュニケーションの具体的な場面で出てきている言葉の問題を取り上げてくださっているの、指針を一つの方向性として今後まとめていくことはできると思います。

一方でそういう方向性がありながら、私が言いたかったのは、ざるの目が大きい見方で作ろうということです。憲章という言葉を使うと大体お分かりだと思いますが、富士山を世界遺産にするときに、富士山をこれからも長く保つには、ごみを持ち帰りましょうなどと言っています。でも、その言葉を聞いていると、やっぱり大事だと思います。だから、コミュニケーションの在り方と言うときに、こういうことがないだろうかと、みんなが困らないように、この日本語を今後とも使っていくんだと、そういう姿勢を示していくのがよいのだと思います。言葉については、日本語以外の世界の言葉も同じだと思いますが、人が潰されるような言葉の使い方はないだろうということを、メッセージとして出していく方がいいのではないかと思います。だから、憲章という言葉を手を上げて、皆様方の御意見をお尋ねしたところです。

一方で、コミュニケーションに関する具体的な指針を作ることも絶対にあるだろう

と思います。

○入部委員

先ほど塩田委員のお話の中に感じがいいというのがありましたが、学生がよく「先生の話を聞かさせていただきます」と言ってきます。非常に感じが悪い子だなと私は思いますが、でも、実際には性格もとてもいい子ですし、ほかに悪いところはないんですが、感じが悪いと。正しい敬語を使えない、適切に使えない。「拝聴します」なんて言ってくれと感じがいいなと思うのですが。敬語が使えないということは、石黒委員の、弱者の武器がちゃんとないということが、それが就活にも関わって、最終的に役員面接のようなところで落ちてしまうということがあるように思います。コミュニケーションには、インターンシップのようなわいわいやるようなところから始まって、グループディスカッションがあつてといったようなレベルがあつて、どこをターゲットにするかということで、川瀬委員から先ほどターゲットをとという話がありましたが、やはりそこを絞っていかないと、どうしても拡散してしまうのではないかと、そのように今日はお話を伺っていて思いました。

○関根委員

塩田委員が最初に相場感とおっしゃいました。今回、いろいろなところから調査をして、リスト化するということを考えると、今までの国語施策以上に、適宜見直しが必要になってくるかなと。常用漢字表でも改定を念頭に置いてやっているわけですが、そういうもの以上に、例えば、何年かおきには、あるいは常にこの分科会の中で見直していく。だから、常用漢字表でも改定の必要性というのは言っているけれども、ある程度、1回出ると、ある一定の年月はそれが基準になります。だから、もしかしたら、今回のこのコミュニケーションに関しては、余り固定的なものを、最初からそういうものではないという前提で作った方がいいのかなと思います。

○塩田委員

賛成です。例えば、1回「ら抜き」はだめだと言ったら、もうら抜きはいいことにはできません。それは多少窮屈だし、言語の実態に合っていないと思います。やはり相場であつて、100年前の日本語が正しいと言われたって、それは現代では通用しないので、そのようにものを見ていくべきだし、出すときにもそういう色彩を出した方がいいのではないかと思います。

○鈴木委員

例えば、「敬語の指針」も、まだぱらぱらとしか見ていませんが、これは敬語の使い方に対する指針を出したのであつて、コミュニケーションということについては敬語だけではありません。石黒委員のお話の中でも、ここは下手に敬語を使うと距離感を持たせてしまうというお話があつたと思います。私もそのとおりだと思います。ただし、そこまで広げると、話が散らかってしまうかもしれません。この場面ではこういう敬語を使うのではなく、もう少しざっくりばらん^{れん}な言い方をしても構わない、といったところまで話を広げていくと、逆に話をどう収斂^{れん}させるかということもあると思います。具体的なイメージがなくて申し訳ないのですが、どうしてもコミュニケーションということに対して、捉え方は非常に大きいんだけれども、やはり両方の見方として、明らかに今まで出している「敬語の指針」とは違う見方でのアウトプットが作れるような気がすると思いました。

コミュニケーション能力というのは敬語の使い方だけでなく、今お話をいろいろお

伺いしていきまして、そのように感じました。むしろ敬語じゃない方がいいという場面も、塩田委員のおっしゃった相場感も含めて、そのときどきによって揺れたりするのかもしれませんが、つまり、ここはむしろ敬語じゃなくて、もっとざっくりばらんな言い方をした方が、よりコミュニケーションが取れるのではないか、いい方向へ、というような、そこまで概念的には頭に置いた上で進めていった方がいいような感じがしました。

○納屋委員

関根委員と鈴木委員がおっしゃいましたが、指針の作成を進める際、「国語に関する世論調査」によって、非対面コミュニケーションの持っている問題点などが出てくると思います。それも盛り込んでいくと、「現代社会における敬意表現」というものがまた新たなものになっていくという感じがします。つまり、あの段階では敬意表現と言ってきましたが、それでネット社会でやっていけるか、とても怖い感じがします。単に対面での敬意という冊子をまとめても弱いと思います。

ですから、その辺りも含んだ上で、「敬語の指針」は明らかに敬語ですが、「現代社会における敬意表現」は、敬語以外の一般語が入ってきています。一般語は、逆に言うとどんどんそれが差別語の方にも行ったりしていないでしょうかという辺りも問題になるのではないかと思います。ですから、その辺に気を付けて、新たに見直すことが必要だったり、現段階ではこうだというものを作る方が無難かもしれないです。

○山元委員

今の一つ前の納屋委員の意見からアイデアを頂きましたが、最初に大きい方針としてのメッセージ、具体的指針というのを示すというのは効果的だと思います。それが以前は美しい日本語、今後は分かりやすさということですか、私が考えるに、共に生きていく社会を作っていくコミュニケーション能力だとか、そういう大きな指針をまず念頭に置く。そして、繰り返しになりますが、そういった能力を、敬語などピンポイントで示すよりは、国際社会、組織や企業の中で、そして、地域コミュニティといった文化、社会的制約と石黒委員はおっしゃいましたか、その社会が求めている文化というのを、まず、総論の分ける層にする。そして、その場合、敬語はこういうのが最適解であるなど。多少本のようにになりますが、そういった段取りで進めていくことはどうかというアイデアを頂きました。

○川瀬委員

国際社会におけるコミュニケーションまで話は広げますか。先ほどの“Hello, Jack”みたいな話もそうですが、国民性ってすごく違うと思います。漠然と国際社会と言っても、それがビジネスの場なのか、それこそフレンドリーな場なのかによって、アジアなのか欧米なのか、先進国なのか発展途上国対象なのか、話がより複雑化しそうな気がします。

文化庁という立ち位置から、調査なり研究なり何らかの、例えば、2020年での言葉憲章みたいなものを出すとしたら、やはり日本国内対象にしておかないと、收拾が付かないかと思います。将来的には、もちろん、国際社会に日本人が日本語というものも一つの武器として出ていく、日本人の感性というものを一つの武器として出ていくというものは、いつかどこかで見てみたいと思いますが、今回に関しては、そこまで考えなくていいのではという気がします。

○納屋委員

私も川瀬委員と同じように、海外に向けてまでのことと言わず、日本国内に向けた

ものでいいと思います。しかし、今申し上げた、憲章という言葉を使うと、実際ここだけの問題では収まらなくなるだろうと想像しています。文化芸術振興基本法ができて、平成13年に改訂され、次に文字・活字文化振興法ができ、10月27日は文字・活字文化の日となっています。その際、読書年まで作って、みんなで一緒に読書を楽しもうという働き掛けを国ではしています。

ですから、このコミュニケーションの問題も、国の施策として、ここで、日本の国民が将来においてもこの言葉を大切にしていくなかで、コミュニケーションが崩れたら終わりじゃないですかと、そういうメッセージを送るのが一番ふさわしいと思っています。決して海外に向けてなんていうことまで言うてはいません。ただし作る段階で、日本語教育小委員会にもどのような考えがあるか聞かなきゃならないでしょうし、様々な業界の方のお考えも伺わなければいけないだろうと思います。

それから、実際、私がこんなことを考えたのは、高等学校の情報の教科書を見たからです。その中には、ネット上で炎上した場合の対応について、一旦スイッチを切りなさいというような内容になっています冷却期間を置きなさいというのです。言葉の問題としてそれでおしまいなんですかと思います。結局これに関する指針がないんです。だから、少し落ち着いて、直接顔を合わせて言葉を交わす段階まで持っていきなさいと言っているのだと思います。こういうことに役立つものを作れたならと考えると、様々な関係部署に聞かなきゃいけないだろうし、もし仮に、憲章ということになれば、それをどんな形で作るのか、何かの決議が必要なのかとか、そういう手順もあると思います。ただし、素案を作るのはこの審議会だと私は思っています。それで、こういうことを申し上げたということです。

○塩田委員

国際化の問題については、私はこんなふうに考えています。ある程度のモデルと言いますか、今の相場を示すことによって、それを逆読みと言いますか、別の読み方をすることが可能だと思っています。

こんなエピソードがあります。イギリスから来ている留学生が大家さんからストーブを借りていたそうなのですが、そのストーブがある朝急につかなくなってしまったんです。そのときに、その留学生が大家さんに「ストーブが壊れました」と言ったら大家さんが激怒したそうです。そういうときに、日本語では、自分が何もしていなくても「ストーブを壊してしまいました」と他動詞形を使わないといけない、自分が壊していなくても、借りた物がそうなったら壊してしまいましたと言うべきだという、そういう知識がなかったわけです。

例えばそういうことを示す、日本語では、何か相手から借りていたものがいきなり壊れてしまったら、自分が悪くなくても「壊してしまいました」と言うのが好かれますよということを示しておけば、普通に日本語を母語としてしゃべっている人は、それを参考にすればいいと思います。また、学習者が例えば「ストーブが壊れました」と言っても、多少大目に見てあげなさいと日本人に言ったりとか、あるいはもっと日本語能力を高めたい人は、自分の判断でそういう言い方をするようにしましょうという使い方ができたりします。ただ、進み過ぎると非常に危険なのが、日本語を話す学習者を育てようとしているのであって、日本人を育てようとしているわけではないという点です。日本語の選択肢として示して、日本語社会ではこういう言い方が好まれます、そこから先は皆さん個々人で考えてくださいというような方向に行くのがいいのではないかと思います。

○石黒委員

私も自分の発表をいろいろ反省していますが、一つは、私自身が日本語教育、つま

り、留学生に日本語を教える仕事をしていて、かつ、今、院生の半分以上が留学生で、その中で難しいと思ったことがあります。川瀬委員がおっしゃるように、もちろん国際社会まで広げると大変なことになるわけですが、ただ、国内問題として、日本語でコミュニケーションしているある中国人留学生の例ですが、元々私の院生で、仕事の部下にもなったんです。そうすると、今まで出てこなかった問題が出てくることがあって、すごく強い言われ方をされて私自身結構ショックだったことがあります。日本

語は流暢^{ちよう}なのですが、ほかの中国人に聞いていくと、要するに、家族とされているらしいんです。お父さんと思われるのだから、家族のときに遠慮なく言うのが中国の流儀だから、そう思われているのだと言われました。そうか、そう理解しなければいけなかったのかと思ったりもしました。

同じように、知らない学生ですが、あるお店でベトナム人の留学生が働いていて、こういうところで一言謝れば済むときに、謝らないんです、一言。それで、こちらがお客として行ってもすごく不快な思いもするし、なぜそこで言えないのかという、教室だったら指導するのになと思ってしまったことがあります。

なかなかその辺が難しく、もちろん、何も日本の文化社会に発想まで同化させる必要があると申しているわけではなく、中国人留学生のケースであれば、どうしてそのように考えるのか聞くということを自分が怠っていたというか、何でそういうことを言うのかということをきちんと聞けていれば、多分そういうトラブルはなくて済んだはずです。今日は「話す」ということを強調して発表しましたが、やはり「聞く」というところから始まらなければいけない。特に国際社会というか、異文化の人を相手にする場合は、聞かないとだめだというのがすごく反省としてあります。そのところも含めた提言というのが何かできればと思います。

○山元委員

先ほどの「国際社会」というのは、日本国内自体がもう多文化化しているので、国内の中での振る舞いを考えるという、そういった意味合いです。

○入部委員

コミュニケーションと言うと非常に抽象的で多様性があるので、何か問題があるとか、課題があるという、かなり意識を持たないと、こういった冊子が出ても学生も見ようと思わないですし、一般国民が見るチャンスもないかと思います。それをあぶり出すのが恐らく調査ということだと思いますが、あぶり出すにしても、どういう課題・問題としてあぶり出していくかというあたりは付けておく必要があると思います。非常に高齢の方は敬語もきちんと使われますし、問題はない方も大半いるわけですが、問題があるところにあたりを付けて調査をして、問題があるから一つの解決策としてこういうものを出したという形でないと、なかなか学生辺りは、やってみよう、読み直してみよう、といったことにならない。開けるところまでいかせるためには、かなりターゲットを、国内でかつ若い人とか、あるいは大学を出て4年間というようなターゲットを絞らないと、何となくこういうのが出ているんだよということになってしまう、そこに非常に大きな危惧を持っています。言ってみれば、その調査のための話合いなのかなというような気持ちはしていますが、大変勉強になりました。

○関根委員

やはり国際化ということに関して言えば、日本語のコミュニケーションの特徴といった観点はやはり組み入れていくべきだろうと思います。そういう意味だと、日本の教育機関や医療機関の方との連携は前々から課題になっていますし、それをする一つ

のいいチャンスでもあるかと思いました。

それから、たとえ日本人が英語をしゃべらなくても、いわゆる日本型の消極的なポライトネスから欧米型の積極的なポライトネスみたいに、例え英語ではなくても、日本語でなくても、そういうのが若い人の中に入ってきているようにも思います。そういう観点からも、コミュニケーションの違い、日本語のコミュニケーションの特徴みたいなものを整理していく必要があるのではないかと思います。

○鈴木国語調査官

今の関連で、日本型コミュニケーションということで、塩田委員が今日発表されたことに関わることです。統語という意味での文法としては誤っていない、しかし、それをそこで使っちゃいけないよというものがあります。それは特に今の日本型コミュニケーションという問題に関わっていて、外国人の方がそれを使ってしまうということがよくあります。文法的な確さと運用の面での不適格さというところに焦点を当てて、前期の日本語教育小委員会の副主査をやられていた迫田委員が、そういう用例を集めていらっしゃるということのある研究会で発表されていました。ですから、その辺りの具体的な例などの情報をここに提供できる可能性はあると思います。

○納屋委員

新学習指導要領で、小学校五、六年の段階から、英語が必修になるとニュースで流されていました。ということは、今まで使っている日本語のコミュニケーションの場面においても、英語を使わなきゃならないということが、年齢的にも下がっていくのではないかと懸念しています。

私たち国民の中には小学校の教育で、今までローマ字を勉強してきた世代や、中学校以降に英語で、とにかく文章を勉強してきた世代もあります。そうした様々な世代の中で、若い人は、英語を勉強したら、英語の方が優れている言語で、日本語は第2言語であると考えたのではないかと。しかし、そのようなことがあってはいけないといったメッセージを送る方がいいと思い、先ほどのようなことを言っています。

○秋山委員

これは「文部科学省に任せたら」とまた言われてしまう部分だと思いますが、学校にずっといた人間として、文化庁が出してくださった指針とか、答申とか、また、今回の「常用漢字表の字体・字形に関する指針」とか、学校に対する影響力がとても大きいです。それを読んでどのように使っていく、どう解釈していくかということを、私も、元校長でしたから問われます。その中にコミュニケーション能力というところで、ある方向性で作ったときに、やはりこれが学校教育の中で、じゃあどうしていこうかというところに当然入っていくと思います。

これは、私が今行っている大学のほんの105名の学生の実態ですが、キャリア教育を教育原理で扱ったときに、これからの世の中で求められている力として重要なものは何かと、18グループに学生を分けてディスカッションさせました。上位三つを挙げさせて、全部前の白板に書かせたときに、これからの社会で求められる一番必要な力のトップが、全部の班がコミュニケーション能力でした。

それと同時に、今までの学校教育の中で、小・中・高の中で付けてもらった力は何ですか、それもグループでディスカッションして、上位三つ挙げさせました。1班もコミュニケーション能力と書いた班はなかった。これはたまたま私の持っている春学期の学生の状況なのかもしれませんが、それだけ、何となく乖離^{かい}している。「何でだ？」ということが教室の中でザワザワザワッと出てきました。私もハッ、と思

いました。国語教育を扱ってきた人間として、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことと扱ってきて、特に私が指導主事をやっていたときには、コミュニケーション能力ということが出てきて、話すこと、聞くことという、よい話し手と聞き手を育てるということを扱ってきているはずなのに、何となくそこら辺が学生たち、つまり、学んできた子供たちの中にストンと落ち込んでいないというか、分かっていないというか、漠としているというか、何かそういう実態に気付いてしまったわけです。

コミュニケーションの中に一つ、内的コミュニケーションという言葉を知っています。自分が今聞いていることをどう思ったか、あの方はこう言っていて、私は実はこうなんだ、でも、あのことをこうこうって、この中で心の中で考えていたものが整理されて、発露されて、表現力になっていく。要するに、思考力、表現力という、そこら辺との兼ね合いでちゃんと教育していかなければならないということを感じました。

そして、やはりコミュニケーション能力を考えたときには、今、委員の皆さんからの説明で、今の世の中はそうだ、学校はどうだと言ったときに、私はどうしても学校の実態に戻って行ってしまって、そここのところも外せないなと思います。でも、それは文部科学省に任せようよというお話もあるかもしれないけど、少なくとも文化庁が出しているものを先生は見ますし、学校教育の中では関わっていくものなので、そこら辺もうまく入れられないかなというのが私の意見です。

○川瀬委員

いろいろ自分の中で迷っていますが、コミュニケーションという言葉に対する万能感というのをいろいろな人が持ち過ぎているんじゃないですか。対人関係が絶対完璧にできているなんて思っている人は恐らく世界中誰もいないと思います。しかし、それはコミュニケーション能力が低いから、コミュニケーション能力さえうまくいけば、もっと何でもできるようになるはずだというような誤解というか、期待というか。だから、そういったものがあるから、秋山委員がおっしゃたように、せっかく学んできたはずのものについても、「私はまだまだコミュニケーション能力なんて身に付いていなくて、これから一番必要なもので…」って、恐らく 100 年たってもみんなが言い続けていそうな気がします。

そう考えると、今の時代に必要とされる対人関係能力というか、安易に「コミュニケーション」という言葉を使わない方がいいのかなとも思います。でも、多分、一般の関心はコミュニケーションとか人に好かれるとか、そういうキーワードがものすごくあると思うので、最終的に何らかの外部に発表するときにはいいキャッチフレーズが必要かと思いますが、まず、その発想の転換を自分たちもする必要があるという気がしてきました。

○入部委員

賛成です。社会人基礎力においてコミュニケーション力を全く使わずに 12 の要素に分解したところに、案外、皆さんが御自分の足りない能力をきちんと見いだすことができたということがあると思います。それをそのまま使ってしまうのは非常に難しいのかなと思います。私は、教育実習が小学校から高校まで全部アメリカだったんですが、コミュニケーション能力と言うと、言語活動に沿ってきちんと教えていこうということで、人は 1 日に 1 冊分の本を聞いて、1 週間に 1 冊分の話をして、1 か月に 1 冊本が読めて、一生かかって 1 冊の本が書けるぐらいの、そういうコミュニケーション、言語活動ができるといいよねということで、聞くということを非常に重視しています。文部科学省がお話しされていましたが、何かそのように多少分けていくのも、ざっくり分けるとその四つの言語活動になるわけですが、それを更にもう少し細分化

していくことも一つの工夫なのかと思いました。

○沖森主査

本日お二人の御発表の後、時間をかなり取ることができましたので、いろいろな御意見を伺うことができたと思います。今後の指針作りに役立っていくものだと思います。ここで一旦本日の意見交換を打ち切りたいと思います。言い足りなかったことや、後で気が付いたことがある場合には、事務局までメールもしくはファクスなどでお伝えいただければと思います。

本日は、石黒委員、塩田委員には御発表くださいましてありがとうございました。改めて感謝申し上げます。また、意見発表につきましては、今後も事務局と相談をしてお願いさせていただきますけれども、是非とも意見を発表したいという委員の方がいらっしゃいましたら、事務局まで御連絡いただきたいと思います。

では、以上で本日の国語課題小委員会を終了いたします。御出席くださいまして、ありがとうございました。